

年間第4主日

マルコ 1・21-28

2024.1.28 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の福音では、人々がイエス様の教えを「権威ある者としてお教えになった」（マルコ 1・22）として驚いたってということから話が始まっていますが、権威ある者としてお教えになるってというのは、なにか言い方とか、「神様はこうです！」って言い切るとか、そういうようなことではありません。むしろ、イエス様の行いと言葉に現実を変えていく力があつたってというふうに理解したほうが良いと思います。

創世記—聖書全体の一番最初の書—は、神様が天地創造されるところが語られていきますけども、そのときに神様が「光あれ」って言えば光があつた、「水と空が分かれろ」って言えば分かれた、「海と陸が分かれろ」って言えば分かれた（創世記 1・3-9）っていうふうに、神様のことばによって現実がその通りになっていくって、そういうような書き方になっています。

マルコの福音書の1章も—今日もわたしたちはその1章の一部を読んでいるわけですが—、イエス様が「わたしに従いなさい」って言えば漁師たちが従う（マルコ 1・17-18）、そして悪霊に「出て行け」と言えば出て行く（マルコ 1・25-26）、病に罹った人に「清くなれ」って言えば清くなる（マルコ 1・41-42）っていうふうに、イエス様の「権威ある者」ってというのは権威主義的な人っていう意味ではなくて、神様のことばです。そのみことばがその通りに実現する神様のように、イエス様のなさること、おっしゃることには現実を変える力があつたというわけです。

ところがイエス様がやって来た会堂—会堂って言うのも神様のみことばが宣べ伝えられる場所でもありますけども—その会堂に悪霊がいたってということは、その会堂の中では神様のことばがイエス様がいらっしゃる前からずっと宣べ伝えられていたけれども、その神様のことばが力を発揮していなかったということの表われと言えるでしょう。

悪霊ってというのは、どんな働きをするかと言えば、神様と人々を分離させる。そして一人ひとりを自分の中に閉じ籠るように、自分のことだけを考えるように促していく。自分中心で、周りのことを自分にとって役に立つか立たないかで判断していくように促していく。そういうのが悪霊の働きなんです。神様と人々を分けるって、そして人と人とを分ける。それが悪霊です。聖霊は反対です。人と人とを繋ぐ。神様とわたしたちを繋げてくださる。

その悪霊が一人の人にピンポイントで支配しているってということは、そういう意味で有り得ないことです。人類全体に及んでいる。つまり、みんなが自分のことしか考えない、その状態が悪霊に取りつかれているってことです。でも、その現象は—苦しみとか—ピンポイントで誰かのところに表れるかもしれない。

いろいろな問題——社会でもいろいろあります——でもその問題が全ての人に等しく影響があって、すべての人に等しく現象が起こっているわけではないです。弱いところに起ってくる。例えば、家庭で大人同士がいがみ合っていたら、その影響は一番その中で弱い者——たとえば子どもたち、特に一番下の子ども——に心身の不調になって出るといえることがしばしばあると言われていました。

同じように、悪霊の力って言うのも、だからその会堂の中でその人だけが特に、って言うよりは、みんな神様から離れる、そういう促しの中にいる。つまり、自分のことだけを考える、そういう社会の中で、特に影響を受けている人がいたというふうに受け取ることができると思うんです。イエス様との出会いというのは、そういう現実を変えていく力があつたわけです。

どうしてイエス様は現実を変えていく力があつたのでしょうか。その答えは福音書をずうっとだんだん読み進んでいくうちに明らかになります。そしてまた、わたしたちはミサのたび毎にそれを確認しています。なぜイエス様の言葉に力があつたのか、それはイエス様が自分のためには何も取っておかない方、イエス様の生涯はすべて他の人のためだったから、これが福音書の結論だし、こうしてわたしたちがミサのたび毎に記念していることです。「イエス様はパンのような方です。他の人を生かすためにご自分のすべてをお渡しになりました」——パンのようっていうだけではなく、わたしたちカトリック信者は、「イエス様は人を生かすためのパンそのものになりました」とまで信じているわけです。他の人のために生きる方、そういう人に出会ったときに、出会った人は影響を受けていく。そして変えられていく。それがまさに、「イエスの教えに権威があつた」、「権威ある者としてお教えになった」ということが意味している内容であると言えます。

他の人のために心を開く人に出会うときに、だんだんに、自分のことばかり考えていた自分自身の中にも他の人のための部分の心の場所が生まれてくる、影響を受けてくるということなのだと思えます。その中心にイエス様がいらっしゃるわけです。

今日は、冒頭にも申し上げましたけれども、「世界こども助け合いの日」ということになっています。かつては「世界児童福祉の日」っていうふうに日本語の名前はなっていましたけれども、この日の趣旨は子どもたちが、互いに自分のことだけを考えるのではなくて、いろんな世界中の、また困難な状況にある同じ世代の子どもたちがいるってことに心を開いて、自分も何かしようっていうふうな気持ちになるように、そういう趣旨なんです。だから、何年か前に——もうかなり前ですかね——「世界こども助け合いの日」っていう分かり易い名前に日本語の翻訳は変わりました。しかし、じゃあ「助け合いましょうね」って言ったときに、子どもたちが

「なんで他の人のことまで考えなきゃいけないのか。自分がいま何をもらえるのか、自分のことが一番関心だ」ってというような態度だとするならば、それはその子が特

にたまたま性格が悪いとか、そういうことではなくて、社会の影響です。その社会を覆っている、そしてまたそれに影響を受けている身近な大人の影響を通して、それがその子どもたちの考え方や生き方に反映されていくということなんだと思います。ですから、わたしたちはこの「世界こども助け合いの日」に当たって、子どもたちにだけ「助け合いましょう」ってことを促すだけではなくて、わたしたちそれぞれの生き方を振り返りながら、改めてイエス様から影響を受ける、そのイエス様の力を自分の中に迎え入れる、その思いを新たにすることが大切なんだと思います。そのようにして、わたしたちは今日ここに呼ばれて集まっている、と言うことができます。

ところで、今日ちょっと長くなるんですけども、今日は信徒総会ですね。この地で具体的に高円寺教会としての一年の歩みを考えていく日であります。で、わたしたちは自分たちの思いで集まったのではない。イエス様に呼ばれて、呼び集められて、そして協力者、この地においてイエス様の働きは今も続いているということの目に見えるしるしとなるべく呼ばれたと信じます。信仰における教会理解ですね。ですから、わたしたちは信仰宣言のときに「教会を信じます」ということも宣言します。それは、教会が自分たちの人間の集まりというだけではなくて、神様の御業の表れなんだ、そこに自分たちが呼ばれて組み入れられたということ、信仰をもって確認しているということになるわけなんです。ですから、特に神様の導き、聖霊の助けを願う—いつもですけど—必要があると同時に、神様によって呼び集められたっていうことを忘れてはならないわけでしょう。

で、今日、前からの委員会の中での約束になっていて、「聖堂の雰囲気と共にくっついていきましょう」ということについて一言申し上げることになってるんですけども、今、特にこの教会の中で、特にミサ以外のときに皆さんの過ごし方に大きな問題があるというわけではありません。でも、時々意識を喚起しないと忘れてしまうかもしれないので、この信徒総会の機会に申し上げたいと思います。

教会は、今申しあげましたように、神様によって呼び集められた。でも、互いにバラバラに呼び集められたのではなく、一つの兄弟姉妹となるべく、一つの家族となるべく呼び集められた神の民であるっていう本質を持っています。で、それをミサの祭儀の時だけではなくていつも表現する場が聖堂ということになります。ですから、お互い同士が挨拶したり出会う喜びを表現するということはふさわしいことです。しかし一方で、それが神様によって呼び集められたということをいつも忘れてはならないから、その中にまず第一に心を向けるのは、そこにイエス様がいらっしゃる、そしてイエス様の恵みによってお互いが出会っているということを意識することです。「目に見える兄弟を愛することができなくてどうして見えない神を愛することができようか」というヨハネの手紙の言葉があります（一ヨハネ 4・20）。

けれども一方で、目に見えない神様を愛するためには、またその恵みを意識するためには、わたしたちの側^{がわ}に特別な工夫が必要なんです。でないと、神様自身は目

に見えない、共に出会っている信仰上の兄弟姉妹は目に見えるから、意識がいつの間にか人の集まりということだけに向いてしまうということがあり得るわけなんです。ですから、共にここで神様に意識を向ける、主の前にあるという喜びのうちにひとつの静けさを保つ、特別な雰囲気を保つということが大切なんだと思います。

それは決してクラシックコンサートの静けさのような、他の人の迷惑にならないように、ってというような人のルールによって人が注意し合う、そういうような静けさではありません。むしろ、神の前に神様の御業によって呼び集められたということから第一に意識することから来る、神様との一致を意識するひとつの静けさです。だから、「挨拶しないでください」とか「神様の方だけを向いてください」、それは間違っています。しかし、やっぱり意識して雰囲気づくりをしていかないと、ただのホールになってしまうということです。

だから、わたしたちがお互いへの配慮のうちに、そしてまた一緒に神に呼び集められた喜びをもって、この場を人生の中で特別な空間にしたいと思うのです。——うるさくすれば神様が、イエス様が怒るからとか、そういうことじゃありません。むしろ問題はわたしたちの側です。わたしたちが特別な配慮をもって意識しないと、神様は、イエス様の恵みは目に見えないからすぐ忘れてしまう。それを思い起こす場がこの聖堂である、ということです。だから「特別な雰囲気を一緒につくっていきましょう」という呼び掛けを委員会として、事務局として皆さんにお願いしたいというわけです。一言もしゃべっちゃいけないということではありませんし、お互いを注意し合いましょうということではありません。でも、愛のうちに、そして神様との一致の雰囲気を共につくっていくという思いで協力していきたいと、そのことを皆さんに提案したいと思います。

なにかほんとの説教みたいになってしまいましたけれども、わたしたちが神様によって、イエス様の恵みによって呼び集められ、そして互いに兄弟姉妹、一つの家族になったという恵みをいつも意識しながら、この世にあって、そしてまたこの地であって、イエス様の今も働いていらっしゃる、つまりはこの地が天国と繋がっている、人間は互いに自分のことだけを考えて生きなければならない者ではない、他の人のために生き、そして心に向けることができるのだということを証しする共同体であり続けますように、今日も一人ひとりの中に、またわたしたちの中にイエス様をお迎えしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>